

すると共に、この「目録」がやがて *annoted bibliography* へと発展することを期待して止まない。

本書はおそらくかなりの長期に亘って作成された図書カードを著者名にしたがいアルファベット順に配列しこれを写真版にしたものと見られる。並べられたカードの記載方式に若干の不統一が見られるのはこうした理由によるものであろうか。

本書は著者名の表示に際し、Chū と namsakun とを一つの複合単位として把える方式を採用しているが、これはタイ語の慣用に沿った試みとして推奨に価しよう。(屢々 *namsakun* を surname として扱う方式が見られるがこれは実情に合わない: Sarit Thanarat は Čhompon (元帥) Sarit であって Čhomphon Thanarat と呼ばれることはない。)

また葬儀の際の nangsū čhaek を cremation volume と表示し、これが故人の略歴を含むか否かを一々明示してあるのはこれを WHO WAS WHO として利用する者にとって極めて有益である。

ただタイ文字のローマ字転写について言えば、母音ではじまる chū を略記する際の便を考えたあまりに glottal stop を一々 q で表記してあるのはいささか繁雑である。(Qamerica=America) 編者の意図は、タイ語式に S. の代りに Sq. とすることに踏み切ることによって無理なく実現するのではあるまいか。

いずれにせよタイ語文献利用者の指針として本書の果す役割りは大きい。今後これにならって各方面のタイ語文献 collection が公開され、それらのすべてが網羅的な総合文献目録へと集大成される日の一日も早くからんことを期待したい。(石井米雄)

R. K. Sprigg: *A Comparison of Arakanese and Burmese on Phonological Formulae: Linguistic Comparison in South East Asia and the Pacific*. School of Oriental and African Studies, Univeresity of London, 1963. pp. 109-132.

ビルマ語方言の内でも比較的古い形を残しているとか、発音が綴字法に忠実であるとかいわれている「アラカン方言」については、今までにも、緬・英両文による報告が幾つかあった。しかし、アラカン方言とは具体的にどのような構造をしており、標準ビルマ語との間にどのような対応関係をもっているのかという事になると、残念ながら従来文献だけで十分な理解が

得られるとはいいい難い状態にある。

この論文の著者は、実際に informant を利用して、まずアラカン方言の音韻体系を明らかにし、ついで標準ビルマ語との間の対応関係を、Prosodic Analysis を用いて示している。著者は、アラカン・ビルマ両語を Tone, Quality, Voice Quality, Labialization の4視点から、各々2種, 3種, 2種, 5種に分析し、対応関係を設定した。ここで認められる規則的な対応系列は、Tone の1型と2型, Quality の z, m, k, Voice Quality の g と g (=non-g), Labialization の s, c, ə, f, b である。この内、z は -V#, m は -Vη, k は -V? を示し、g は従来 Creaky Tone (J. A. Stewart), Tone III (W. Cornyn, R. I. Mc David), Tone 9 (R. B. Jones) 等と称されているもの、S は spread, c は centralized, f は fronting, b は back vowel を含んだ各 syllable を意味する。

以上の例を見てもわかるように、この論文には著者独自の略語が頻繁に用いられているので、あらかじめ各略語の概念をはっきりつかんでおかないと、全体を理解する事が容易でない。この事は、前作 *Junction in Spoken Burmese* (1962) についてもいえる。分量の割には、内容が難解だといわれるゆえんである。

紙数の大半は、b, s, ə, f, c 各 Syllable の分析とその対応関係とにさかれているが、内容としてもこの部分が一番充実しており、各節毎に詳細な exemplification がある。殊に、アラカン方言の特徴ともいえる Rhotacization に関する説明は、群書の中で類を抜くといっても過言ではなかろう。ビルマ語に関心をもつ人たちに一読をすすめたい。

ただ難点をいえば、この論文の目的が、Phonological Formulae の作成におかれている以上やむを得ない事ではあるけれども、言語史との関連性が全くみられない点である。また、アラカン方言は、標準語には認められない特異な語彙をもっている事でも有名であるが、それらの考察も全く除外されている。標準語の動詞1002に対して、アラカン方言が667しか対象とされていない事も、はじめから対応成立の確実な語彙のみに焦点を絞ったからにはほかならない。いわば、定形化し易いものだけをとりあげて、その他の扱い難い剰余部分は、完全に切り捨てたという感じである。

(大野 徹)